

山川早生(やまかわわせ)

登録番号：第1402号

育成者：田中法一

登録年月日：昭和62年8月7日

来歴：「宮川早生」の枝変り

登録者：山川農業協同組合（福岡県
山門郡山川町立山964）

特 性

「山川早生」が世に出たとき、「宮本早生」および「市文早生」に続く3番目の扁平系極早生と騒がれた。ほとんどの極早生温州は「宮川早生」かその珠心胚実生系の「興津早生」の枝変りである。したがって、親に似て、やや腰高の果形を示すものが多い。そのような極早生品種群の中にあつて、これらの扁平系は魅力的な存在であつた。しかし、「山川早生」が品種登録されるためには、すでに登録されている「宮本」および「市文」の扁平系極早生との遺伝的相違が指摘されねばならず、その調査に数年を要した。

このような理由でデビューは遅れたが、その優秀性は広く認められ、「宮本早生」、「上野早生」に続く1,000ha以上の栽培面積をもつ極早生に成長した。「宮本早生」のカンキツモザイクウイルス保毒を警戒した地域では、代わりに本品種を採用した。中四国の諸県では、「宮本早生」より多く栽培されている。九州では「宮本早生」を主力品種とする鹿児島、大分の両県を除き、発生地福岡県はもちろん、各県ともかなりの栽培面積をもつ（平成2年現在）。

樹勢は「宮川早生」に比べるとやや弱いが、樹の大きさはほぼ同等で、栽培上、とくに問題はない。肥培管理は早生品種に準じて行えば良い。早目に収穫を終えるので礼肥を早目に施し樹勢の回復をはかる。

果実の果形指数は140で、「市文早生」ほどではないが扁平系に属する。果面の平滑度は「宮川早生」なみで、平滑な「宮本早生」よりは粗い。9月上旬着色開始。着色の進行は、「宮本早生」よりやや遅れるが、着色果の橙色は濃い。減酸は「宮本早生」や「市文早生」よりやや遅いが、糖は高く、食味は濃厚である。「宮本早生」や「市文早生」は大果になりやすいが、本品種はM・L果が中心で落着いている。9月の早期出荷では「宮本早生」の後塵を拝することがあるが、10月には優位に立つ。とくに10月中～下旬は本品種が最高の味を示すときで高値をつけている。「宮川早生」同様に樹上に置けば糖を増す完熟型の性質を示すので、完熟ミカンとして出荷するのも一興である。

鹿児島や紀南などの早出し地帯で、いわゆる早期出荷に用いる品種ではない。一般の早生温州地帯で、10月に完全着色し味ののった果実として出荷する極早生である。とくに内陸の腰高になりやすい地域では採用して良い扁平系の品種である。

(岩政正男)